

きらめき人

中央団地の丘で楽しく生きる。ここも住民交流の場にしたい。

仲松 義也さん



YOSHIYA NAKAMATSU

警視庁勤務時代に感じた「地方がしっかりしないと都会が弱くなる。素直な子どもを育てるのが地域の役目」その強い想いが現在の活力源だ。

日 本が戦後の混乱から復興を果たし、高度経済成長期にシフトチェンジしたころの昭和36年、仲松さんは警察官になった。世の中は「学生運動」や「あさま山荘事件」など大きな社会事件も発生していた。警視庁機動隊員として危険な現場に配属されることも少なくなかったと振り返る。

10年ほど務めたら宮城に戻るという父親との約束もあり、昭和47年に宮城県涌谷警察署に転属。その後、県内北部や沿岸部各署にて活躍、平成15年、定年退職の日を迎えた。

忙しかった毎日から解放され、のんびり過ごすと思いきや、大好きな畑づくりに没頭し始めた。現在、手掛けた農地には梅などの樹木が育ち、28羽の鶏が走り回っている。「毎朝4時起床の生活も苦にならないよ」と笑顔の仲松さんだが、地域の皆さんとの交流もまた楽しいと教えてくれた。自宅の裏山が高台移転事業区域として造成され、新たな住宅地となった時、そこに暮らし始めた皆さんとの交流が深まり、「なかよし会」を立ち上げた。

会のメンバーと共に、児童生徒の登下校を見守る活動を行う一方、交流会や旅行も楽しんでいる。「中央団地北側の丘を世代間交流ができる癒しの丘にする。ウサギを放し飼いにして触れ合える芝生広場も作りたい」と、力強く語る仲松さんの表情は明るい。



新図書館の設立に司書が関われるのは貴重なことだという。「図面とにらめっこしながら、本の配置などスタッフみんなで悩んだ。迷路のような建物で本との偶然の出会いも楽しんでほしい」と小林さんは目を細める。

AKARI KOBAYASHI

今 年4月に開所した南三陸町図書館。自然光がたっぷりと差し込む館内は明るく開放的で、本を包む南三陸杉のさわやかな香りが、よりいっそうの心地よさをもたらす。

「小さいときから図書室や図書館という空間が大好きだったんです」と話すのは、唯一の司書として活躍する小林朱里さん。秋田県能代市出身で、山形県の短大で資格を取得後、見知らぬ町で司書キャリアをスタートさせた。採用試験のときに初めて南三陸を訪れた彼女は、復興途上の町に少なからず衝撃を受けたと振り返るが、「中学生以来の夢だった司書」への想いに揺るぎはなかった。被災した図書館は、これまでベイサイドアリーナ脇の「コアラ館」を使用してきた。しかし限られたスペースでの企画・広報には限界も感じていたというが、生涯学習センターの完成によって可能性は大きく広がった。

「学校も近くなったので、ティーンズコーナーを新たに設け、興味をもってもらうような仕掛けをしたり、これから迎える夏休みに向けて工作資料展、読書感想文向けの書籍の充実などの企画をしています。本を読まなくても、気軽にみんなが集まれるような居心地のよい空間にしたい」

町民の拠り所となるような施設を目指して、若き司書の挑戦は始まったばかりだ。

小林 朱里さん

心地よい図書館に向けて、若き司書の挑戦。

ひとめぐり